

共通聖域と他所（よそ）の神々*

——ヘロドトス 8 巻 144 節における「共通」の意味に関する覚書——

アイリン・ポリンスカヤ Irene Polinskaya

ロンドン大学キングスカレッジ古典学科

翻訳 佐藤 昇（東京大学）

目次

1. はじめに
2. 「ギリシア人であることの要件 *to hellenikon*」をめぐる「同じ *same*」と「共通の *common*」
3. ギリシア宗教を描写する形容詞「共通な *koinos*, *-e*, *-on*」
4. 「同じ」神々、土地の神々 *enchorioi theoi*、他所（よそ）の神々
5. ギリシア宗教における「評価 *valuing*」：他のギリシア人が祀る神は自分の神か
6. 結論

1. はじめに

ヘロドトス第 8 巻 144 節は誤訳されることが多い。本報告はこの点から説き起こしたい。ここは「ギリシア人であることの要件（ト・ヘレニコン *to hellenikon*）」を提示している箇所であり、宗教的な側面から、θεῶν ἰδρύματα τε κοινὰ καὶ θυσίαι [=神殿と供犠を共有していること] が「要件」の一つに挙げられている。この発言をもって、ギリシア世界に宗教的統一性があつたと主張する研究者も少なくない。逆にこうした（推論の結果として得られたに過ぎない）宗教的統一性や共通の宗教 *common religion* といったものが、「ギリシア性／ギリシア人であること *Greekness*」の根本的要素だと主張されることもある¹。これは循環論法である。しかしながら、問題はそれに留まらない。そもそも史料には「神殿と供犠」としか述べられていない。それにもかかわらず、これを宗教や祭祀一般にまで敷衍することは妥当なのだろうか²。第二に、ここで述べられている「共通 *common*（あるいは共有）」という

* 本訳稿は、2010 年 3 月 23 日に東京大学山上会館で行われた講演原稿の翻訳である。ロンドン大学キングスカレッジ古典学科で教鞭をとるポリンスカヤ博士は、桜井万里子東京大学名誉教授の招聘に応じて来日した。二人はスタンフォード大学で机を並べ、ギリシア碑文学の大家、故 Michael Jameson の指導とともに受けた間柄である。同大学に提出、受理されたポリンスカヤ博士の学位論文はアイギナ島の宗教に関するものである。爾来、彼女の主たる関心はギリシアの宗教や碑文に向けられているが、近年の動向を反映し、アイデンティティの問題にも関心を抱いている。訳者が在外研究のためロンドンに滞在していたときに（2007 年 8 月）、彼女はすでにこの問題に着手していた。講演は科学研究費補助金助成研究基盤（B）「古代地中海世界における規範と公共性の比較文化史的研究」の一環として行われた。当日の講演では原稿読上げのスタイルをとらなかったが、大意はここに掲載した通りである。講演後の質疑なども加味して、修正を加えた原稿がいずれ英文で発表される予定である。なお本訳稿は、専門家以外の多くの方に読まれるよう意識に努めており、また本人の了承の下で僅かな修正を施している。本文中に〔〕で示した箇所は理解を助けるための訳注である。

¹ Cf. F. W. Walbank (2002) *The Problem of Greek Nationality*, in Th. Harrison (ed.) *Greeks and Barbarians*, Edinburgh [=Phoenix 5 (1951)], 249: 「共通の *common* 血、共通の *common* 言葉、共通の *common* 宗教、共通の *common* 生活習慣——曖昧さのない、明白な言葉である」。

² Cf. J. Hall (1997) *Ethnic Identity in Greek Antiquity*, Cambridge, 35.

概念は、広く緩やかに捉えてもよいのだろうか。本報告では、いずれの問いに対しても否定的見解を提示することになる。ヘロドトスが記したこの一節は、全古典文献および碑文史料の中でも独特で、古代ギリシア宗教を扱う現代の研究者にも重要視されている。したがって、まずはこの一節について議論を十分に尽くすべきであり、それを踏まえた上で、後半の議論を展開していくこととする。

ヘロドトス 8 巻 144 節を正確に理解することは、パンヘレニックな〔全ギリシア的な〕要素と地域的要素の相互関係を焦点とする、ギリシア宗教の統一性をめぐる大きな議論に影響を与えることにもなる。上述のようにヘロドトス 8 巻 144 節から、前 5 世紀当時、「共通のギリシア宗教 common Greek religion」という観念が存在していたと考える研究者もいる。しかし、この命題は検証されなければならない。そのための一方策として、本報告では次の点に関しても分析を加えることとする。ギリシア人は他のギリシア人共同体の神殿、祝祭、神々をいかに扱っていたのだろうか。たとえば彼らは、自分たちの神殿、パンヘレニックな神殿、他のギリシア人の神殿、このそれぞれに同じ態度を示していたのだろうか。

仮に均一な「共通のギリシア宗教」という観念があったとすれば、ギリシア人は誰もが皆、神を敬う気持ちに違いはなく、ギリシア世界中のあらゆる宗教施設、祭祀を全て同じように認めていたに違いない。しかしながら、この仮定は史料を精査した上で証明しなければならない。史料分析にあたり、ここでは「評価 value」という概念を解釈のための道具とする。「評価する」という行為は、ポジティブには、他者の価値を肯定的に受け止めることを意味する。そういった意味では、評価という概念は包括性を指向しており、評価する主体と他者とを結びつける役割を果たす。しかしこれは同時に、両者の差異と境界を強調するものでもある。このように「評価する valuing」という行為は「査定する evaluating」という行為とは幾分異なる。後者が主に排他性を指向しているのに対し、前者は包括性と排他性、どちらの意味で用いることもできる。したがって「評価」という概念の方が、古代ギリシアの宗教活動について、共有されるものと地域固有のものとの相関関係を探るのに適切だと言えるだろう。

2. 「ギリシア人であることの要件 *to hellenikon*」をめぐり「同じ same」と「共通の common」

古代ギリシアのアイデンティティをめぐり研究において、ヘロドトス 8 巻 144 節ほど頻繁に引用される一節はない。ここには *to hellenikon*（英語では *hellenicity*、*Greek identity* など、さまざまに訳される〔本訳稿ではヘロドトスの文脈を踏まえ、「ギリシア人であることの要件」と意識した〕）の定義が記されている。

「ギリシア人であることの要件 *to hellenikon* は、同じ same 血と同じ same 言葉であり、また神殿と供儀を共有していること *sharing*、そして習慣が同じ same であることにあり」 τὸ Ἑλληνικόν ἐὼν ὁμαῖμόν τε καὶ ὁμόγλωσσον, καὶ θεῶν ἰδρύματα τε κοινὰ καὶ θυσίαι ἡθεὰ τε ὁμότροπα.

以上がヘロドトスによる *to hellenikon* [=ギリシア人であることの要件] の定義であ

る。しかしこうした記述があるからと言って、前5世紀のギリシア人共同体あるいは個々のギリシア人が一般に、自らの状況をこのように捉えていたということにはならない。これは希望的観測、あるいは理想像に過ぎない。今日、ほとんどの研究者がこうした見方に立っている。実際、このような定義は古代の史料の中で類例がない。すなわち同時代の平均的ギリシア人の見方と考えるべきではなく³、ヘロドトス個人の大胆な見解ということになるだろう⁴。挙げられている個々の項目は同時代の他の作家にも確認できるが⁵、しかし宗教的施設 *institution* や習慣 *ethea* といった文化的要素に力点を置いているのは、きわめてヘロドトスらしい、この作家ならではのもののようだ。

たしかにヘロドトスが挙げている「ギリシア人であることの要件」は、同時代のギリシア人の総意ではない。このことは多くの研究者が認めることである。しかしその中の宗教的要素については、これまでおよそ正しく理解されることは少なかった。ここで挙げられている宗教的要素は、*koina* な（つまり「共通の *common*」あるいは「共有の *shared*」）建造物 *idrymata*=聖域と供犠 *thysia*、すなわち信仰のための物理的な場所と儀礼活動である。ここには神というカテゴリーは関わってこない。宗教的要素とは対照的に、他の3要素（血、言葉、慣習）は高度に均質であること、実質上「同じ」である状態を示す形容詞 *homoios* と結びつけられている。これは「共通の *koinos* [形容詞の男性単数。 *koina* は中性複数]」という形容詞に含意されているような、複数のものが部分的に「重なり合っている」という状態には留まらない。*homoios* と *koinos* の相違を考慮するか否かで、古代ギリシア宗教について描かれるイメージは大きく異なる。問題点を浮き彫りにするため、近代の英訳をいくつか比較してみよう。

D. Grene は、「血」についても「言葉」についてもまとめて、ギリシア人は「一つである *one*」としている一方、神殿や供犠、慣習については「共通の *common*」という言葉で充てている⁶。R. Thomas と J. Hall は、血と言葉、神殿、供犠を「共通の

³ [ここでは同胞ギリシア人であるスパルタ人を説得し] 行動させるべく、アテナイ人が理論的に「ギリシア人であることの要件」に訴えかけている。しかしながらヘロドトスの叙述は、ギリシア人の間に反対の力、すなわち妬みや敵愾心が作用していたことを描き出している。この点については E. Baragwanath (2008) *Motivation and Narrative in Herodotus*, Oxford, 160-178, 161, n.1 を見よ。Cf. *Ibid.*, 175: 「アテナイ人が *to Hellenikon* を定義する際に主張しているように (8.144.2)、ギリシア人が本当に同じ血を共有していたとしても、だからといって彼らが同胞や、あるいはアイデンティティを共有するその他の抽象的な観念に対して忠誠心を持ち、それによって動かされていたということはないだろう」。J. Hall (2002) *Hellenicity: Between Ethnicity and Culture*, Chicago and London, 190, n.78 は、ヘロドトス 8 巻 144 節を「ギリシア人によるギリシア人アイデンティティの定義」ととらえる研究者を列挙している。

⁴ Hall, *op.cit.* [n.3], 190-191 によれば、「ギリシア人であることの要件」に関して文化的な要素を強調するのは、ヘロドトスの革新的な貢献である。血の繋がりに力点を置くのがそれまでの伝統的態度であった（ヘロドトスも「同じ血 *homaimon*」を「要件」の1番目に置いている）。

⁵ プラトン『国家』5.470e 参照。

⁶ 「我々はギリシア人としての要件を共有している：我々是一个の血脈に由来し、言語に関しても一つで *we are one in blood and one in language*、神々の神殿は我々全員に共通のものである *belong to us all in common*。また我々は育ちも共通しており、我々の慣習はそこから生まれてきた *our habits, bred of common upbringing* (Herodotus (1987) *History*, trans by D. Grene, Chicago and London, 611)。」

common」とし、習慣を「類似の similar」ものとしている⁷。つまり彼らは、英語の形容詞をギリシア語の用法に合わせて選択しようとしていない。おそらく「一つの one」「共通の common」「類似の similar」を同義語と見なして、意識しているのである。Ch. Sourvinou-Inwood や A. Schachter、S. Said の訳はもう少し正確である。彼らはともに、血、言語、習慣に「同じ same」という形容詞を用い、神殿や供犠に別の言葉（common、shared）を用いている。ヘロドトスが実際に区別している通り、忠実に訳し分けている⁸。

homoios の複合語と *koinos* を同じように訳すということは、両者がこの文脈では同じ意味を持ち、事実上入替可能だと主張していることになる。つまりヘロドトスは言葉を正確に選択しなかったのであり、彼には、*homoios* の複合語で表現される要素（血、言葉、慣習）と *koina* とされる要素（神域や供犠）との間に、決定的な区別をもうける意図がなかったと考えていることになる。しかしながら「同じ same」ものと「共通の common」ものの間には概念的な、数学的な違いがある。前者は比較をする2つの要素が合同であることを意味し、後者はそれらが交差すること、部分的に重なり合うことを含意している。

ここで注意しておきたいのは、「ギリシア人であることの要件 *to hellenikon*」という理想化された概念の中で、宗教的要素（共通 common の聖域と供犠）こそが歴史的にもっとも現実味をもっていたという点である。当時のギリシア人が、ポリスやエトノスの違いを超えて、同じ血（親族関係）、同じ言語、同じ習慣を分かち合っていたという、ヘロドトスの主張は、ありえないとはいわないまでも、およそ考古学史料、文献史料、碑文史料のいずれとも合致しない。史料はむしろ地域色に溢れている⁹。しかし宗教活動に関して言えば、ヘロドトスは同一性 *sameness* を主張しているのではなく、共通のものを挙げているに過ぎない。すなわち、神域と供犠である。それゆえ、全ては「共通 common」ということをいかに理解するかにかかっている。ヘロドトス 8 巻 144 章における *koinos* は、正確にはどんな意味を持っているのだろうか。単語自体は、いく通りかに解釈できる。第一に、神域と供犠が、[特定の場所や儀礼を指すのではなく、]一般的なカテゴリーとして用いられており、抽象的、一般的なものとして言及されている可能性が考えられる。「我々ギリシア人というのは、概して、神々のために聖域を造営し、供犠を執り行うものだ」というように、類型論のレベルで共通性があることを意味する。第二に、やや抽象度は低くなるが、なお包括的な用法が考えられる。すなわち、全てのギリシア人は皆等しく、ギリシア世界のどの神域に立ち入ることも、どの供犠に参加することも認められているといったことである。最後に、具体的かつ限定的な意味で用いられている可能性が考

⁷ R. Thomas (2001) *Ethnicity, Genealogy, and Hellenism in Herodotus*, in I. Malkin (ed.) *Ancient Perceptions of Greek Ethnicity*, Cambridge, Mass., 213; Hall, *op.cit.* [n.3], 189.

⁸ S. Said (2001) *The Discourse of Identity in Greek Rhetoric from Isocrates to Aristides*, in Malkin, *op.cit.* [n.7], 275; A. Schachter (2000) *Greek Deities: Local and Panhellenic Identities*, in P. Flensted-Jensen (ed.) *Further Greek Studies in the Ancient Greek Polis*, Stuttgart, 10; Ch. Sourvinou-Inwood (1990) *What is Polis Religion?* in O. Murray and S. Price (eds.) *The Greek City from Homer to Alexander*, Oxford, [reprinted in R. Buxton (ed.) (2000) *Oxford Readings in Greek Religion*, Oxford], 300.

⁹ Hall, *op.cit.* [n.3]; Baragwanath, *op.cit.* [n.3], 160-178; J. McInerney (1999) *The Folds of Parnassos: Land and Ethnicity in Ancient Phocis*, Austin, Texas, 28-35.

えられる。特定のギリシア人が特定の条件下でそれらを共有している状況を指しているという考え方である。以下では、各々の可能性について順番に検討を加えた上で、「ギリシア人であることの要件 *to hellenikon*」を定義する際に用いられた *koinos* という単語が、最後の意味、つまり具体的な意味で用いられていると論じていきたい。

研究者たちが「共通のギリシア宗教 *common Greek religion*」と言う時、この「共通 *common*」という言葉は、先に述べた3通りの、いずれの意味でも用いられてきた。第一の解釈に近いのは、S. Price の次の見解である。「クセノフォン『アナバシス』の中で提示されている宗教システムは、全ギリシア人に共通のものである。あまたの都市から集った一万人は、もはや単なるギリシア人部隊ではなく、一つの「動くポリス」同然であった。彼らの慣習や態度は、全ギリシア人に共通の宗教システムを鮮やかに描き出している¹⁰」。ここで Price は、ギリシアの宗教的慣習が類型論的に類似していることを指摘している。この種の共通性 *commonness* は高度に抽象的な思考の結果得られるものであり、「対立的 *oppositional*」と見なされることもある。すなわちギリシア人は、たとえばペルシア人やエジプト人などと比較対照したとき、こうした共通点を共有するもの同士ということで似通って見えるのである。

第二の解釈は W. Burkert のギリシア宗教観に現れている。「ギリシア宗教については地域ごとの差異や祭祀ごとの特殊性が強調される。たしかにギリシア人はそれぞれ、自分たちの宗教活動をさまざまな形で表現している。しかし彼ら自身はこうした慣行を、一つの枠組みの中で本質的に併存可能なものと捉えており、やり方こそ違うものの、同じ神々 *the same gods* に奉献していると考えていたのである¹¹。」「共通 *common*」という概念を第一および第二の意味で捉えてこそ、聖域や供犠に用いられていた *koinos* な性格を、宗教全般にまで拡大して捉えることができる。

Survinou-Inwood は共通性 *commonness* を第一、第三の意味で理解している。「ギリシア人は自分たちを一つの宗教集団の一部と見なしていた・・・こうしたアイデンティティは、全ギリシア人が参加し、非ギリシア人が排除されるような儀礼の中で表明され、またこれを通して強化されるものである。中でももっとも重要なのはオリュンピア競技祭だった¹²」。Schachter はヘロドトス 8 巻 144 節の *koinos* を第3の意味に限定して捉えるべきだと強く主張している。「ヘロドトスは、ギリシア人が同一の宗教を共有していたと言っているのではない。・・・彼は共通聖域、共同供犠について語っており、おそらく特定の場所と特定の行事、すなわちパンヘレニックな大規模神域とそこで行なわれる祝祭が念頭に置かれているのである¹³。」次節では、ヘロドトス 8 巻 144 節の *koinos* が第一、第二の意味を取り得るのか否か検証するために、神域や祝祭、神格、儀礼を意味する言葉に適用された *koinos* の用例を、碑文および文献から可能な限り網羅的に検討する¹⁴。

¹⁰ S. Price (1999) *Religions of the Ancient Greeks*, Cambridge, 3-4.

¹¹ W. Burkert (1985) *Greek Religion*, Cambridge, Mass., 8.

¹² Sourvinou-Inwood, *loc.cit.* [n.8].

¹³ Schachter, *op.cit.* [n.8], 10.

¹⁴ 以下で議論する事例は、TLG (*Thesaurus Linguae Graecae*)および PHI SGI (The Packard Humanities Institute, *The Searchable Greek Inscriptions database*)を検索した結果得られたものである。 *hieron*, *naos*, *temenos* *thysia*, *bomos*, *panegyris* などの宗教関連用語が *koinos*, *koina*, *koinon*

3. ギリシア宗教を描写する形容詞「共通な *koinos*, -e, -on」

TLG および PHI SGI を用いたテキスト検索によれば、宗教関連の事物を叙述するのに用いられる *koinos* の事例はさほど多いという訳でもないが、しかしそれらは明確に一つの傾向を示している。まず初めに、ヘロドトス 8 巻 144 節でも明確に挙げられていた、聖域と供犠に言及した事例を瞥見していく。トゥキュディデス 3 巻 57 章 1 節では、スパルタ人の包囲に屈し、抹殺されようとしているプラタイアイ人が描かれている。ここで彼らはスパルタ勢に次のように説く。スパルタ軍はやがて戦利品を神に捧げるだろうが、それは不評を買うことになるだろう。「ギリシアに恩恵を与えた我々から武具を剥ぎ取り、共通の神域に πρὸς ἱεροῖς τοῖς κοινοῖς 奉納することにも、人々は納得するまい」。ここで述べられている共通聖域 *hiera ta koina* は、各地のギリシア人が訪問し、他のギリシア人の奉納物を目にするような場所であり、明らかにパンヘレニックな聖域である。

イソクラテス『パネギュリコス（民族祭典演説）』43 節は、休戦と敵対関係の一時停止に言及しており、これは明らかにパンヘレニックな祝祭が催される際の条件を指している。すなわち共同で捧げる祈りと供犠 *euchai kai thysiai koinai* というのが、パンヘレニックな聖域で行なわれるものであることに疑いの余地はなく、さらに供犠 *thysiai* に対して *koinos* が用いられている点からすれば、当該箇所をヘロドトス 8 巻 144 節にきわめて近い平行例と見なすこともできよう。

さて、一大祭典 *panegyreis* を創設した方々は顕彰されてしかるべきであります。何となれば、私たちが互いに休戦の儀を交わし、敵対関係にあってもこれを解消し、しかる後に一つところに結集し、さらにその後、共同で祈りと犠牲を捧げ εὐχὰς καὶ θυσίας κοινὰς ποιησαμένους、我々が一族近親であることを思い起こし、将来に渡って互いに一層友好的になる...そういった慣習を私たちに授けて下さったのですから。

トゥキュディデス 1 巻 25 節のエピダムノス紛争をめぐる叙述にも共同の祝祭 *common festival* に関する言及がある。コルキュラ攻めを唱えるコリントス人は、その理を説くにあたって、彼らが「共同で行う祝祭でも ἐν πανηγύρεσι ταῖς κοιναῖς 慣習的に定められている特権をコリントス人に認めようとせず、犠牲獣に与る優先権もコリントス代表に認めようとしなかった」と訴えている。ここで想定されている祝祭が正確に何を指しているのか、定かではない。しかしこれらが狭い意味で「共通の／共同で行う *common*」ものとされていることは明白である。すなわちコリントスやコルキュラといった特定の政治共同体から代表が集まる、そういった場が想定されているのである。いかなるギリシア人にも、いかなる条件下でも該当するような、抽象的な意味で「共通 *common*」なのではない。

以上の諸事例から明らかのように、*koinos* という語は、聖域、祝祭、そして儀礼（祈りや供犠）といった宗教的な事物に適用する場合、きわめて限定された意味で

しか用いられていない。特定の機会に、特定の場所で、いくつかの特定の政治共同体が共有することを指しているに過ぎない。ヘロドトスによる「ギリシア人であることの要件 *to hellenikon*」には神についての言及はないが、これに対してトゥキュディデス 3 巻 59 章 2 節には、ある種の神々を記述する際に *θεοὺς τοὺς ὁμοβωμίους καὶ κοινούς τῶν Ἑλλήνων ἐπιβοώμενοι* という表現が用いられており、さらに興味深いことに *koinos* と *homoios* の合成語が併置されている。これはいかに理解すべきだろうか。一体これは Burkert が言う「同じ神々 *the same gods*」と同じ意味で、ギリシア人に「共通の *common*」神々というものがあったことを証明しているのだろうか¹⁵。この句は、前 427 年、プラタイアイ人がスパルタ人に懇願する場面で用いられている。長期にわたって包囲され、疲弊しきったプラタイアイ人がスパルタ人に助命嘆願をする箇所である。プラタイアイ人は「私どもの神々はあなた方のものと同じで、私たちはつまり宗教的にはひとまとまりというわけです。ですから私たちの命を助けて下さい」と言っているのだろうか。文脈を丁寧にたどれば、ここで言及されているのが抽象的、一般的な「ギリシア人共通の神々 *common Greek gods*」ではなく、二組のギリシア人がかつて、ある特定の機会に一緒になって呼びかけた特定の神々を指していることが分かるだろう。「ギリシア人に共通の、祭壇を同じくする神々 *θεοὺς τοὺς ὁμοβωμίους καὶ κοινούς τῶν Ἑλλήνων* に呼びかけて、皆さんにお願いいたします。私たちにはそうする権利もあり、また必要に迫られてもおります...」問題の句は「同じ祭壇で（祀られる）、ギリシア人に共通の神々に呼びかけて」あるいは Werner のように「私たちのだれもが利用できる祭壇をもつ、ギリシアの神々に呼びかけて *calling upon the gods of Hellas at whose altars we all worship*」と訳すべきである¹⁶。

もしも神々が *koinoi ton Hellenon* とのみ形容されていたとすれば、ここでは漠然とした神々というものが想定されていたと言えるかもしれない¹⁷。しかし実際には祭壇に関する言及もある以上—*homobomioi*—、ここでは儀礼の場面が想定されていることになる。同一の祭壇で祀られた神々というのは、特定の機会、すなわちスパルタ人とプラタイアイ人の父祖たちが誓いを立てる際に呼びかけた神々のことである。*homobomios* という形容詞は通常、神々について記述する際には、たとえばデメテルとコレのように、同じ祭壇で供儀が行なわれる複数の神格に対して用いられる¹⁸。しかしこの文脈では、*ton Hellenon* という語によって修正が加えられ、明らかに意味の転移が生じている。すなわち同一の祭壇が複数の神格によって共有されているのではなく、複数の異なる集団が同一の祭壇で同時に同一の神（々）を祀ることを意味している。言い換えるならば、引用箇所想定されていたのは、ギリシア人に共通で、さらに一つの祭壇で共同で供儀を行なうことができる神々だったことになる。これはパンヘレニックな神域の神々にこそあてはまる。

実際、ヘロドトスの叙述においても、共通聖域 *shared sanctuaries* の神々のみが真

¹⁵ 上註 11 参照。

¹⁶ Thucydides (1972) *History of the Peloponnesian War*, trans. by R. Werner, London, 229.

¹⁷ H. S. Versnel (2000) *Thrice One: Three Greek Experiments in Oneness*, in B. Porter (ed.) *One God or Many?* Chebeague, 125, n.117 and 127-129.

¹⁸ E.g. *IG II*² 1442.

に全ギリシア人共通のものであり *common to all Greeks*（たとえばパンヘレニックな祝祭）、あるいは特定のポリス横断的グループに共通のもの（たとえばカラウレイアにあるようなアンフィクテュオニア〔隣保同盟〕の神殿やパンイオニオンのようなエスニックグループの神殿）と見なされていたことが窺われる¹⁹。ペルシア戦争の勝利を記念し戦利品を神々に奉納する場面のことである²⁰。ヘロドトス 8 巻 121-123 章によれば、サラミスの海戦で勝利を収めた後、戦闘に参加したギリシア人は一緒になって、イストミアおよびデルフォイの神々に奉納すべく、戦利品を取り分けている〔いずれもパンヘレニックな聖域である〕。たしかに初穂はサロニコス湾の地方神格——スニオン岬のポセイドンとサラミス島のアイアス——にも奉納されている。このことから、こうした地方神格も全ギリシア艦隊から同等の扱いを受けていたと思われるかもしれない。しかし次の段落から明らかなように、こうした地方神格が特別扱いにされているのは、殊にアテナイ人の偏狭な関心を反映してのことであつた。すなわちアテナイ人は、艦隊を指揮し、指揮をふるう地位にあつたため、自分たちにとって特に重要な地方神格を選んで祀ることにしたのである。

ヘロドトス 8 巻 122 章を丁寧にしてみると、もう一つ重要な点に気がつく。全ギリシア人の守護神 *patron* であるデルフォイの神アポロンは、それぞれ個別の政治的・地理的集団と独立した関係を築いているのである。デルフォイのアポロンは、全ギリシア人から共同で捧げられたものでは満足せずに、サラミスでの勝利に主要な役割を演じ、最大級の榮譽を勝ち取ったアイギナ人たちから、別個に追加の奉納品を要求しているのだ。この事例はかなり皮肉にも感じられる。すなわち、ギリシア人の方は共通でデルフォイのアポロン神に奉納し、自分たちの一体性を演出していたにも拘らず、神の方では森を見ずに、一本一本の木を見ていたのである。

ピンダロスのパイアン第 6 歌 63 行では、デルフォイのテオクセニア〔神々を歓待する祝祭〕においてパンヘラス *Panhellas*〔全ギリシアというほどの意味〕のための供犠が行なわれている²¹。これにはギリシア各地から代表団が派遣されており、参加者はこのとき実際に一つの宗教集団を形成している。このように諸ポリスから集ったギリシア人が一つになって祝祭を執り行うといった特定の文脈、特定の機会においてはじめて、供犠 *thysia* や犠牲獣 *hiera* は参加者全員にとって真に共通のもの *common* となった。こうした事例と比較すれば、ヘロドトスが 8 巻 144 節において *koinos* という形容詞を意図的に選択し、しかもきわめて限定的な意味で用いていた

¹⁹ この他、たとえば *IG IX 1² 2, 583* はアカルナニア人が共有する共通聖域 *koinon hieron* に言及している。*IG IX 1² 1, 69* は、アイトリア人に共通のアポロン・テルミオスの祭壇 *koinos bomos* について述べている。デルフォイのアポロンの聖域のみが「ギリシア人に共通のアポロン神の聖域 *to tou Apollonos hieron to koinon ton Hellenon*」という称号を得ている (*IG II² 680*)。

²⁰ プラタイアイの戦いの後、ギリシア人は再び共同で奉納品を捧げた。「戦利品を集めると、彼らはデルフォイの神のために 10 分の 1 を取りよけた。そこから黄金の鼎が奉納された。これは祭壇のすぐ側、青銅製の三岐大蛇の上に据えられている。オリュンピアの神にも 10 分の 1 が取りおかれ、そこから 10 ペキュスの青銅製のゼウスが奉納された。イストモスの神に対しても同様で、そこから 7 ペキュスの青銅製のポセイドンが制作された」(ヘロドトス 9 巻 81 章)。

²¹ デルフォイのテオクセニアをめぐる近年の議論については、たとえば B. Kowalzig (2007) *Singing for the Gods: Performance of Myth and Ritual in Archaic and Classical Greece*, Oxford, 188-201; B. Currie (2005) *Pindar and the Cult of Heroes*, Oxford, 302; I. Rutherford (2001) *Pindar's Paean: A Reading of the Fragments with a Survey of the Genre*, Oxford, 310-315 を参照。

ことが強く示唆される。すなわちヘロドトスは、パンヘレニックな神殿や供犠、すなわち全ギリシア人が一つの宗教的共同体として集結する場面だけに言及していたのである。

碑文および文献において宗教用語とともに用いられる *koinos* の用例を見る限り、ギリシア人が一つの宗教集団として振る舞う交流の場は、明らかに、時間的、空間的に限定されていた。パンヘレニックな宗教センター以外で共同の宗教活動を行なうには、たとえば一緒に誓いを立てるといったような、特別の儀礼を要する状況が必要となる。さもないとギリシア人は、パンヘレニックな宗教センターと認められた場所以外では、国や地域の異なる者同士が入り交じって一つの祝祭を挙行しようとしたとしても、政治的単位ごとに、あるいはエスニックグループごとに分かれてしまっていた。たとえばクセノフォンの軍隊では(『アナバシス』5巻5章5節)、ギリシア各地からそれぞれの状況に応じて傭兵部隊に参加した者たちが一つの部隊を構成している。しかし彼らは、Price の解釈とは反対に(上註 10)、自分たちが宗教的にそれぞれ異なる集団に属しているという感覚を失うことはなく、それぞれの民族的出自に応じて祝祭を開催している。「そこで彼らは45日間留まった。その間彼らギリシア人は、まず神々に犠牲を捧げ、それから民族集団 *ethnos* ごとにそれぞれ行列行進を行い、体育競技会を催した」。『アナバシス』のギリシア人部隊が「移動する一つのポリス」であり一つの宗教集団を成しているという、Price の結論は受入れられない²²。他の事例でも同様のことが指摘できる。新都市メガロポリス建設を開始するにあたり、祝賀の儀に参加したギリシア人は、抽象的な全ギリシア人共通の神格に全員で犠牲を捧げるのではなく、グループごとに自分たちの地域の神々に供犠を行なっている²³。

最後に、ナウクラティスに建設されたヘレニオンについて考察したい。この事例をもって、ギリシア人〔古代ギリシア人は自分たちをヘレネス *Hellenes* と呼んだ。したがってヘレニオンというのは「ヘレネス=ギリシア人の神殿」というほどの意味になる〕は自分たちを宗教的に統一した集団だと見なしていたと言えるのだろうか。近年、数名の研究者が、ナウクラティスのヘレニオンをパンヘレニックな宗教センターと見なすべきだと主張している²⁴。この事例は丁寧に分析する必要がある。間違いなくヘ

²² Price, *loc.cit.* [n.10]: 「救いの神ゼウスが何者なのか、何が適切な犠牲なのか、誰もが知っていた。共同で供犠を行なった後、軍隊は時折、地域別に行列行進や体育競技を行なった」(5.5.5)。

²³ パウサニアス 4巻27章6節。「準備万端整うと、アルカディア人によって犠牲獣が提供されたので、エパメイノンダス本人とデバイ人たちは、慣例に倣い、ディオニュソスとアポロン・イスメニウスに対して供犠を行なった。アルゴス人はアルゴスのヘラとネメアのゼウスに、メッセニア人はイトメのゼウスとディオスクロイに、そして彼らの神官団は偉大なる女神たちとカウコンに供犠を行なった。それから彼らは自分たちの半神にも、この地に戻り、ともに暮らすよう訴えた。初めの半神はトリオパスの娘メッセネ、続いてエウリュトス、アフアレウスとその子たち、それからヘラクレスの末裔のうち、クレスフォンテスとアエピュトスに。しかしもっとも声高に召還されたのはアリストメネスだった」。

²⁴ A.B. Lloyd (1988) *Herodotus, Book II*, Leiden, 224; I. Malkin (2003) *Pan-Hellenism and the Greeks of Naukratis*, in M. Reddé et al. (eds.) *La naissance de la ville dans l'antiquité*, Paris, 91-96; U. Höckmann and A. Möller (2006) *The Hellenion at Naukratis: Questions and Observations*, in A. Villing and U. Schlotzhauer (eds.) *Naukratis: Greek Diversity in Egypt. Studies on East Greek Pottery and Exchange in the Eastern Mediterranean*, London, 17 はヘレニオンをパンヘレニックな聖域で

レニオンに言及しているのは、唯一ヘロドトス 2 巻 178 章だけである。ナウクラティス発掘時に出土したグラフィティと同じ場所に確認された建築物の遺構は、ヘレニオンに属するものとされてきたが、実際のところ、これらがヘレニオンとどう関係するのかが明らかではなく、さらにそれが正確に意味するところも最終的には決定できない²⁵。

ヘロドトス 2 巻 178 章によれば、ヘレニオンというのは神域 *temenos* である。建物内部の詳細については記されていない。神殿や祭壇、宝物庫、その他、祭祀に関連する施設があったのかどうか、知る術もない。考古学者が暫定的にヘレニオンに同定した遺構には複数の部屋があり、会食には適しているようだが、祭壇の痕跡は認められない²⁶。もちろん祭壇は持ち運び可能なものを使っていたかもしれないし、未発掘区域にあったのかもしれない。しかし問題の建物がヘレニオンなどではなかった可能性もある。この遺構が主に祭祀目的で使用されていたことを示唆するのは、各種の神格への奉納文が刻まれた数多くの陶片である。ディオスクロイ、アポロン、ヘラクレス、アルテミス、ポセイドン、そして確実とは言い難いものの、どうやら「ギリシア人の神々」にも奉納されていたらしい。ヘレニオンとされる建物で発見された陶片には、ミュティレネおよびロドスといった地名が出自として記されている。これらの国々がヘレニオン創設に関わったことは、ヘロドトスも伝えている。ここで議論の中心となるのは「ギリシア人の神々」に奉納する旨記されたグラフィティである²⁷。最大の問題となるのは、奉納のために用いられたこのような定型句が、祭祀においてどのような意味を持ったのかということである。そもそもこうした奉納品が発掘されたからといって、ギリシア人が宗教的に一体となって共通の *common* 神々を祀る活動をしていたと言えるのだろうか。しかしこの問題に入る前に、まずは「ギリシア人の神々」という定型句が本当に確認できるのかどうか、確定しておかなければならない。

Möller は「ギリシアの神々」に言及しているものとして、27 のグラフィティを挙げている²⁸。これらのグラフィティはいずれも一部、あるいは相当部分が欠損している。神々 *theoi* とギリシア人 *Hellenes* という単語が併記されていると言えそうなのは僅か 2 例に過ぎない (Höckmann and Möller [n.24], Appendix, no. 3 および no. 23)。別の 2 例では、ギリシア人という単語の前に冠詞 *tois* が読めることから、上記 2 単語が併記されていたと推測できる (Höckmann and Möller [n.24], Appendix, no. 1 および no. 2)。しかしこれら 4 例とて、それぞれの欠損部分に別の単語や句を補うことも可能で、「ギリシア人の神々」という定型句を刻んだものではないのかもしれない。この補いは、数々の断片の欠損部に句を補い、これを積み重ねることで得られた推測に過ぎないのである。多くの陶片にはギリシア人 *Hellenes* という単語の複数

はなく、ヘレニックな聖域と呼び、Malkin の定義を修正した。

²⁵ A. Möller (2000) *Naukratis: Trade in Archaic Greece*, Oxford, 105; H. Bowden (1996) *The Greek Settlement and Sanctuaries at Naukratis: Herodotus and Archaeology*, in M. H. Hansen and K. A. Raaflaub (eds.) *More Studies in Ancient Greek Polis*, Stuttgart, 17-37, 18-28.

²⁶ Höckmann and Möller, *op.cit.* [n.24], 12-13 and 18-19.

²⁷ これにより、D. G. Hogarth (1898-99) *Excavations at Naukratis*, *ABSA* 5, 44 はその神殿をヘレニオンに同定していた。

²⁸ Höckmann and Möller, *op.cit.* [n.24], 19.

属格形が見え、またこれらとは別に、神 *theos* という単語の複数与格形が多くの陶片から確認できる。これら別個に現れた二つの史料群を考え併せることで、「ギリシア人の神々」という定型句の存在が推測でき、上述の4断片についても、欠損部をそのように補うことが推奨されているのである。

それでは一体、これらのグラフィティに刻まれた「ギリシア人 *Hellenes*」というのは、あらゆる地域の、全ての、どのギリシア人をも指すのだろうか。エスニックグループを表す、この単語の意味から考察を始めると良い見通しが得られるかもしれない。もしもナウクラティスが、デルフォイやオリュンピアと同等のパンヘレニックな宗教センターだったとすれば、初めの問いには肯定的に答えることになるだろう。しかしどうやらそうはいかないようだ²⁹。ヘロドトスによれば、ナウクラティスのギリシア人の聖域はどれ一つをとっても、ギリシア人の全てを分け隔てなく受入れていた訳ではない。ヘレニオンも創設に携わった9都市のみに利用が認められ、他は排除されていたのである。そして排除されていたサモス人、ミレトス人、アイギナ人の方は、それぞれ自らの聖域を創設しており、その利用者を自国出身者に限定していた。こうしてみるとヘレニオンは、ごく一般的で典型的な組織だったように思われる。ヘロドトスはこの他に、同じ原理で運営されている聖域を2つ挙げている。イオニア系の12都市によって創設されたパンイオニオンは、他のイオニア系ギリシア人の利用が禁じられており（1巻143章）、ドリス系の5都市（以前は6都市）によって創設されたアポロン・トリオピオスの聖域も同様である（1巻144章）。これらを叙述する際にヘロドトスが強調しているのは、共通聖域の創設が同一のエスニックグループによる共同事業であったにも拘らず、参加権、利用権がそのグループ全体に及んでいないという点である。むしろ構成メンバーは具体的で、時間的、空間的に固定されている。これらの共通聖域はそれぞれ、イオニア系ギリシア人、ドリス系ギリシア人、あるいはギリシア人の中でもたまたまその創設に携わった人々のものに過ぎず、全イオニア人、全ドリス人、全ギリシア人のものではない。すなわちナウクラティスのヘレニオンは、名前こそ全ギリシア人に普遍的に当てはまるようにも思われ、またギリシア人なら誰もが参加できそうにも思われるが、実際には全くパンヘレニックな聖域などではないのである。ここで「ギリシア人 *Hellenes*」という語が限定的な意味で用いられている以上、いったん立ち止まり、「ギリシア人の神々」に呼びかけている奉納品の定型句についても（実際に確認できるとしての話だが）、その意味を注意深く検討しなければならない。

ヘレニオンは分け隔てなく全ギリシア人を受入れていたのではなかった。とすると、何ゆえその区域に「ヘレニオン」なる呼称を選んだのだろうか。2通りの説明が可能である。まず集団のアイデンティティを表明する際、これに伴って生ずる凝集化作用 *aggregative mechanism* が考えられる。すなわちヘレニオン創設に携わった各地のギリシア人は3つのエスニックグループ、イオニア系、ドリス系、アイオリス系に分かれ、ギリシア人＝ヘレネス以外にこれらを同時に包含する適切な用語がなかったという可能性が考えられる³⁰。あるいはエジプトのファラオの主導によっ

²⁹ Höckmann and Möller, *op.cit.* [n.24], 18; Bowden, *op.cit.* [n.25], 24.

³⁰ Höckmann and Möller, *op.cit.* [n.24], 17.

てヘレニオンの創設あるいは組織再編が行なわれたのだとすれば、その命名もファラオによるものだったのかもしれない。すなわち自分たちエジプト人と区別をして、それからおそらくフェニキア人をはじめとする他の外来民族とも区別して、対比的にギリシア出身の外来民族の聖域を「ヘレニオン」と名付けたのかもしれない。凝集化とは逆の作用である。これら2つのうち、ヘロドトスの叙述はどちらかと言えば前者を支持している³¹。というのもヘレニオンを構成するメンバーは、〔エジプト人などと対比されて描写されているのではなく〕神殿の縁起を語るようにして列挙されているのである。

ヘレニオンの利用は創設メンバーに限定され、他のギリシア人はどうやら閉め出されていた。この組織編成上の特徴から考えてみると、「ギリシア人＝ヘレネス」という言葉は、ナウクラティスでは文脈に規定された特殊な意味を持っていた可能性が考えられる。すなわちこの語はナウクラティスの全ギリシア人でもなく、まして場所を問わずにあらゆるギリシア人を全て指すのでもなく、ヘレニオンを創設し、これに参加した都市の代表を指すものとして、限定的に用いられていたのかもしれない。したがって陶片にヘレネス *Hellenes* の複数属格が刻まれていたとしても、それはその陶器の所有者を意味している可能性もある。すなわち、ヘレニオンで会食を行う集団「ヘレネス」の所有物と言っているのかもしれない。奉納品に用いられる定型句の一部である必然性もない。他方で、仮にこれが「ヘレネスの神々」という定型句の一部だったとして、ここで呼びかけられる神々が抽象的な「ギリシアの神々 *Greek gods*」ではなかったと考えることもできる。つまりヘレニオンに参加する諸都市のそれぞれの守護神が、この神域でも崇拝され、呼びかけられていたとも考えられる。しかしながら、こうした定型句が祭祀を念頭においたものだと解釈することはきわめて難しい。ギリシア宗教に関する現存の史料を総ざらいしても、これはきっと独特な例だということになるだろう。実際この他には、文献でも碑文でも、「全ての男女の神々 *pantes theoi kai pasai*」か、あるいは単に「神々 *theoi*」、もしくは「神 *theos*」といった定型句ぐらいしか確認できない³²。この点を考えるために、ヘレニオンの祭祀活動がどのように運営されていたのか、思い描いてみる必要がある。

まず神域 *temenos* は9つの異なる共同体によって共有されていた。したがって、おそらく各共同体は神域内にそれぞれ自分たちの神々のための祭壇を設営し、個別に分かれて儀礼を行っていたのだろう。たとえばパフラゴニアにいたクセノフォンの部隊では、異なるエスニックグループが、それぞれに分かれて神への供犠と行列行進を行なっているが（『アナバシス』5巻5章5節）、これと同様だったと考えられる。しかしそれと同時に、「ギリシア人の神々 *Gods of the Greeks*」に対する祭祀（儀礼もしくは祝祭）がなければ、そうした神々に奉納が行なわれるはずがない。一体、ヘレニオンを構成する諸都市は、彼ら共通の守護神格を祀る、共通の会食などを催していたのだろうか。あるいはヘレニオンへの参加が認められない、その他のギリシア人たちが呼びかける神々とは一線を画すため、区別する必要性から

³¹ Malkin, *op.cit.* [n.24], 93.

³² Versnel *op.cit.* [n.17], 127.

「ヘレネスの神々」という定型句が創り出されたのであろうか。

ヘロドトスが示唆するように、ヘレニオンは祭祀活動において構成員とその他を分離する傾向にあった。このことは何より、この地域でギリシア人同士が激しく競争していたことを示している。とりわけナウクラティスに別の神域を建設した3都市アイギナ、サモス、ミレトスは、前古典期のメジャーリーガー級大交易国であった。ヘレニオン参加都市の方はマイナー級で、一段格が低く、それ故、大国の影響に抗するのには共同戦線を張るしかなかった。それに加えてヘレニオン建設の背後には、おそらく資金に関する現実的な問題もあっただろう。すなわちサモスやミレトス、アイギナならば自分たちで自らの神域を建設することもできるだろうが、小交易国では、ひとまとまりにならないと一つの神域すら建設できなかったという訳である。以上の諸点から次のように結論づけることができるだろう。もしも欠損のないグラフィティが発見され、間違いなく「ヘレネスの神々」と読めるものがナウクラティスで発見されたとしても、それはせいぜい、その都市のヘレニオンと呼ばれる神域を共有する集団、すなわち9つのギリシア都市にのみ関わる、9都市を守護する神々に限定的に帰せられるものに過ぎないだろう。

4. 「同じ」神々、土地の神々 *enchorioi theoi*、他所（よそ）の神々

たしかに個々の都市およびその代表が、パンヘレニックな神域のみならず、ギリシアの他の都市で奉納をすることもあった³³。しかしそうした場面で彼らは、「ギリシア人共通の神々 *common Greek gods*」に詣でている、あるいは本国に祀られているのと同じ神々 *same gods* を参拝していると思っていたのだろうか。そういった状況が無批判に想定すべきではない。実際、彼らは他国でもギリシアの神々、すなわちギリシア人が祀る神々を参拝しているが、それは他所（よそ）の神々であって、自分たちのものでもなければ、共通のものでもないのである。前節までに古代ギリシアのさまざまな文献史料の中で、神域、祝祭、神々との関連で用いられた「共通性 *commonness*」の意味を探ってみたが、ここではまずヘロドトス5巻92-93章について検討する必要がある。これまでこの一節は、「異なるポリスで信仰されている神々が、当然、同じ神々と認識されていた」ことを示しているとされてきた³⁴。このエピソードでは、コリントス人ソクレスが僭主ペリアンドロスの横暴を伝え、同じく僭主であるヒッピアスの手に再びアテナイを渡したりしないように、スパルタ人の説得を試みている。

³³ 429/8年にフォルミオンがペロポネソスの艦隊を破った際、アテナイ人はコリントス湾に面したリオンというところでポセイドン神に一隻の船を献じている（トゥキディデス2巻84節）。またアンフィポリスを攻略し、アテナイ軍をレキュトスまで追撃したブラシダスは、その後、「（レキュトスの）制圧は人の力でなし得たのではなかったと考え、女神（レキュトスのアテナ女神）のために神殿に30ムナを渡して、さらにレキュトスの防備を取り除いて更地にし、この土地全体を神域として奉納した（トゥキディデス4巻116章）。」

³⁴ Sourvinou-Inwood, *loc.cit.* [n.8]. Cf. Burkert, *loc.cit.* [n.11]: 「ギリシア人は自分たちのそれぞれの宗教活動について、それがいかに多様なものであっても、基本的には矛盾しない、併存可能なものだと思っていた。一つの世界観、枠組みの中で、同一の神々をさまざまな方法で祀っていると見なしていたのだ。」

〔ソクレス曰く〕「ギリシアの神々を θεοὺς τοὺς Ἑλληνίους お呼びして、諸都市に僭主政など立てぬよう、ご照覧いただきます。……」。……するとヒッピアスはソクレスと同じ神々に τοὺς αὐτοὺς θεοὺς 呼びかけ、彼に応えた。曰く、コリントス人こそは誰よりもペイシストラトス家を待望することになろう。…

興味深いことに、ソクレスが自らの発言の証人として「ギリシアの神々 *hellenioi theoi*」に呼びかけると、続いてこれに反論しようとするヒッピアスが呼びかけたのは、ソクレスと同じ神々だったのである。両者はどの神々のことを言っているのだろうか。

Sourvinou-Inwood はここを「どれでもいい、ギリシアの神々 any Greek gods」と理解している。しかし仮にそうだとすると、ヘロドトスは「ギリシアの *hellenioi*」などと特徴を加える必要はなかったように思われる。この場面ではギリシア人だけが集まっており、「蛮族の民」の参加もなかったのである。したがってこれまでに見た他の事例同様、ここでも、ギリシア人全体に関わる神々というのはどの神でもいいわけではなく、とりわけパンヘレニックな聖域の神々を意味しているように思われる。この「ギリシアの神々 *Hellenioi theoi*」という表現は、先に論じた、トゥキュディデス 3 巻 59 章 2 節に見られる「ギリシア人共通の神々 *koinoi theoi ton Hellenon*」という表現の縮訳版だろう³⁵。また仮にソクレスがどんなものであれ、とにかく一般的にギリシアの神々 any Greek gods に呼びかけようとして「ギリシアの神々 *hellenioi theoi*」に訴えかけていたとすれば、ヒッピアスが全く同じ神々に呼びかけることなどあり得ない。矛盾が生ずることになる。ヒッピアスも同じ神々に呼びかけたというのであれば、まずソクレスの方が特定の神々に呼びかけ、そうしてヒッピアスもこれをくり返したというのでなければ、辻褄が合わない。したがってこの神々が一般的、抽象的なものだったはずがない。そうすると「ギリシアの」という形容詞は、この文脈ではパンヘレニックな聖域の神々を指す以外にはあり得ない。より厳密には、デルフォイそしてアポロンを指すのだろう。ヘロドトスの叙述がこのことをよく示している。ヒッピアスが「同じ神々」に呼びかけて意見を述べたシーンは、彼が「誰よりも神託に通じている」という記述で閉じられているのである。すなわち、ここで呼びかけられているのは不特定のギリシアの神々ではなく、神託に関してパンヘレニックな権威を有する具体的な神殿と神格だと推測できる³⁶。

最後にもう一例、ローマ時代の作品、アイリアノス『ギリシア奇談集』6 巻 1 章

³⁵ Kowalzig, *op.cit.* [n.21], 206 も、力点の置き方は異なるものの、*Hellenioi theoi* に言及し、ヘロドトスがこの表現を特別に限定的な意味で用いていると論じている。「ヘロドトスはフティオティスがドリス（系ギリシア）人発祥の地だと主張している。ここでヘロドトスは、彼らドリス人を『ギリシア民族 *Hellenikon ethnos*』と呼んでおり、いくらか読み手を当惑させるが、しかしこれは、イオニア系ギリシア人がペラスゴイ族とされているのと同様にしているのがある。ヘロドトスはさらにスパルタ人に関する文脈でのみ、『ギリシアの神々 *Hellenioi theoi*』という表現を使い続けている。あたかも、テッサリアのフティオティスから出た全ての人々とドリス系ギリシア人全体を結びつけるかのようである」。

³⁶ 一つの演説の中で、複数の神々 *theoi* と単数の神 *theos* への呼びかけが行なわれ、さらに個別の神格（たとえばゼウスやアポロン）にも名指しで呼びかけるということはきわめて一般的なことであった。Versnel, *op.cit.* [n.17], 117-129 参照。

にも「ギリシアの神々 *Hellenioi theoi*」という表現が見られる。しかしこれは明らかに、蛮族の民との対比で用いられている³⁷。以上で管見の限り全ての用例を網羅してきた。

ヘロドトスはこの他に「*Hellenikoi theoi* (ギリシアの神々)」という表現を用いている。たとえば1巻90節ではリュディア王クロイソスが、ギリシアの神々 *Hellenikoi theoi* は恩に報いないことを慣わしとしているのかと、使節に尋ねさせている。ここでは明らかにギリシアの神々をそれ以外の神格と対照的に描写しようという意図が見られる。他の箇所でも、*Hellenikos* という語はきまって他民族と対比する際に用いられている。たとえば、2巻91章ではエジプト人との慣習の違いが述べられ、4巻76章ではスキュティア人の慣習との対比がなされている。3巻130章ではギリシアの治療法がペルシアと対照的に描かれ、7巻91章では武具についてパンフュリア人との違いが意識されている。

以上、*Hellenioi* や *Hellenikoi* といった形容詞が宗教関連用語と共に用いられている事例を瞥見してきたが、それらの事例から、ギリシア人が共同で、ギリシアのあらゆる神格を一括りにした抽象的なまとまりを崇拝していた様子はいかがえなかった。むしろこれらの形容詞は、まず二国間／多国間関係について述べるくだりでは、特定の、あるいは広く認められたパンヘレニックな祭祀センターを意味している。さもないとギリシア人と非ギリシア人の宗教的カテゴリーの差異を対比的に提示するために用いられている。そして注意すべきことに、今回取り上げた *koinoi hoi theoi ton Hellenon*, *hellenioi theoi*, *hellenikoi theoi* といった表現はいずれも文献史料にしか現れない。ナウクラティスのヘレニオンの例を除いて、「ギリシアの神々」あるいは「ギリシア人の神々」といった表現は祭祀を行う場面では姿を見せないのである。

さて本報告ではこれまでに、宗教関連用語と共に用いられる「共通 *koinos*」という言葉について分析を加え、それが具体的で狭い意味でしか用いられていないことを示してきたが、この他にも一般的、抽象的な「ギリシア人共通の神々」という観念には明らかにそぐわない事例がある。ギリシア人の他国訪問に関わること、すなわち地方神殿 *epichoric shrine* の外国人 *xenoi* 立入禁止である。最も有名な事例は、アテナイの祭祀の中心アクロポリスにおけるドリス系ギリシア人の立入禁止である。立ち入ろうとしたスパルタ〔ドリス系〕のクレオメネスが、これを理由に引き返すよう指示されている（ヘロドトス5巻72章）。碑文史料も文献史料を支持している。たとえばパロスでは、娘神コレコレの神域への立ち入りがポリスの全自由人市民に認められているが、ドリス系の外国人は、奴隷と並んでこれを禁じられている³⁸。

もしもギリシア人が単純に、区分のない一つの宗教的な集団であり、全てのギリシアの神々が全ギリシア人に共通であったとすれば、ギリシアでは宗教的な面において外国人 *xenoi* など存在しなかっただろう。そこで Sourvinou-Inwood は、ギリシア世界における宗教的存在に2つの次元があると想定した。ポリスの次元とパンヘ

³⁷ 「シキュオン人はペレネを攻略すると、ペレネ人の妻と娘を売春宿に置いた。このうえなく野蛮な行為だ、ギリシアの神々よ *θεοί Ἑλλήνιοι*。私が記憶している限り、蛮族の民の間でもこれは立派なことにはならない」。

³⁸ パロス：IG XII 5 225[2]、デロス：ID 68(=LSS 49)。

レニックな次元である。ギリシア人は後者の次元において一つの宗教集団と見なせるのだという。一つにまとまった宗教集団に属していると仮定できるとすれば、ギリシア人は互いに、他のポリスや他のエトノスの宗教的慣習や神域、そして神々を親近感や崇敬の念をもって遇していたことだろう。本報告では、最後にこの問題を扱わなければならない。古代ギリシアの国々と各国の代表者たちは、自分たちを一つにまとまった共通の宗教集団に属しているものと見なし、お互いを宗教的な存在として尊重していたのだろうか。他のギリシア人が祀る神々や彼らの宗教施設を評価 value していたのだろうか。

5. ギリシア宗教における「評価 valuing」：他のギリシア人が祀る神は自分の神か

一般的にギリシア人は、国ごとに神々に関わる場合も、パンヘレニックな場面で諸国がともに関わる場合も、抽象的、一般的な神々ではなく、特定の場所の特定の神格に訴えかけていたとされている。いくつか例外的だとされてきた件に関しては、これまでの議論で修正を試みてきた。古代ギリシア人は神話や詩の中でしか、抽象的な神々、彼ら全員に等しく関わる神々に出会うことはなかった。祭祀の面から言えば、古代ギリシア人は聖域、祝祭、そして神々を、自分たちのもの、他のギリシア人のもの、それから自分たちと他のギリシア人が平等に関わるもの（すなわちパンヘレニックなものや広域のもの、あるいは連邦組織のもの）、以上の3つの視点から見ていた。これ以外の見方はなかった。実生活の中で神々という存在は、抽象的な「フリーエージェント」ではあり得なかった。彼らは特定の場所、特定の共同体と結びついていたのである。自分の土地の神々こそが自分の神々であり、助力を期待できるのは自分の土地の神々だけだった。他の地域の神々は、近くとも遠くとも、その地域の人々のものであり、自分にはせいぜい無関心であるか、あるいは事によると敵対的になることさえあった。共通聖域 common sanctuaries の神々は、理論的には公平であるが、デルフォイに関してたびたび確認できるように、実際には一方に肩入れすることもできた。

どの都市であれ自分たちの神々に最大の関心を払っていたということは、件の一節、ヘロドトス 8 巻 144 章が例示している。アテナイ人は〔ペルシア軍からのメッセージを伝える〕マケドニア王アレクサンドロスの来訪に際して（8 巻 143-144 章）、ペルシア王が自分たちの神々や半神の社殿と神像を焼き払ったこと、そしてこれは紛れもなく血をもって報復するしかないということを2度繰り返している。このアテナイ人の返答では、自分たちの神像や社殿が焼き払われ、攻撃されたことが「ギリシア人であることの要件 *to hellenikon*」とは区別され、それよりも前におかれている。後者の理由もまたペルシアに抵抗するよう彼らを動かしていた動機ではあったし、またそこには共通の（すなわちパンヘレニックな）神域と供犠に関する言及もあったのだが、それよりも彼らは自分たちのものを優先しているのだ。すなわち、アッティカ地方の神域と共通の神域とが区別されているのである。前者はアテナイ人にとって最も優先すべきものであり、後者は、そこに参加することでギリシア人意識が高められはするものの、地域の神殿や神像に比べれば二の次だった。少なくとも文脈からはそう読み取ることができよう。

それでは宗教的にはもっぱら自分たちの地域のことに心を砕いていたギリシア人

たちは、それぞれお互い同士を宗教的な存在として認め、評価していたのだろうか。2 例についてのみ丁寧に分析していきたい。僅かな事例ではあるが、これらは、古代ギリシア人が宗教的な事物や儀礼に関して自分たちのものと他のギリシア人のものを区別する際の特徴をよく表している。第一に、ギリシアの他の国に足を踏み入れるギリシア人は、同時に他の神々 *other gods* の土地、もしくは他者が信仰する神々 *gods of Others* の土地に足を踏み入れているということを認識していた。スパルタ人の侵入に際し、プラタイアイ人は彼らスパルタ人そしてアルキダモスに次のように訴えている（トゥキディデス 2 巻 71-72 節）。

それでは私たちはあの時誓いを立てた神々、あなた方の父祖伝来の神々と *theous tous hymeterous patroious*、私たちの土地の神々 *theous hemeterous enchorious* を証人として、あなた方に言います。プラタイアイの土地を侵さぬように、誓いを破らぬように

ここでは神々が、人に属するもの（スパルタ人の父祖伝来の神々 *theoi patroioi*）、あるいは土地に属するもの（プラタイアイの土地の神 *theoi enchorioi*）として描写されている。以下に挙げる事例でも、ギリシアの異なる国々が宗教的に相互に関わりを持つとき、神々がどこに・誰に属するのか（「所属」）、あるいは人々がどういった神を有しているのか（「所有」）、こういった考え方が重要であることが分かるだろう。プラタイアイ人とスパルタ人の交渉が決裂し、プラタイアイ人が中立を守らないことにすると、アルキダモスは侵攻を決断し、地域の神々に詫言っている（2 巻 74 章）。

プラタイアイの土地を治める神々と半神たちよ、証人となって下さい。私たちはそもそも不正を働こうとしていたのではなく、この者たちが誓約をしておきながら、先に同盟を放棄したために、この地にやってきたのです。私たちの父親があなた方に祈り、ペルシア人を打ち破った、この地に。あなた方がギリシア人に戦い易い場所として提供して下さったこの土地に。今とて何かをなすといって、不正を働くつもりはありません。と言いますのも、私たちは妥当な案をいくつも提示したのですが、合意を得られなかったのです。ですから先に不正をなした者がその不正の罰を受け、正当に罰を科す者が報復を成就するよう、お取り計らい下さい。

このエピソードからどんなことが分かるだろうか。スパルタ人はプラタイアイの神々を、自分たちとプラタイアイ人に共通のもの *koinoi*、あるいはスパルタの神々と同じもの、はたまたパンヘレニックな宗教センターの神々と同じものと見なしていたのだろうか。もちろんそんなことはあり得ない。彼らが呼びかけたのは特定の領域の神々、つまりプラタイアイの神々であった。同時に彼らスパルタ人は、自分たちにプラタイアイの神々に呼びかける権利があると感じ、神々を自分たちの味方に引き入れることができると期待していた。すなわちスパルタ人は、プラタイアイの神々を他所（よそ）の神々と認めてはいるものの、同時に彼らが潜在的には自分

たちの神々にもなりうるかのごとくに考えていたのである。Versnel が古代ギリシア人の思考の中に見事に見つけ出した、認知論的「ウィンキング winking」現象、すなわち同じ事柄に関して対照的な、ときに対立的な考えを守り続ける能力が、きっとここにも現れているのだろう³⁹ [2つの事態や考えが矛盾している時、両者を同時に見据えず、一方には心理的に目をつぶること]。しかしスパルタ人が他所（よそ）の神々、すなわちプラタイアイの神々に訴えたのは、彼らがこの神々を自分たちスパルタ人自身の神々と基本的に同じものだと認識していたからなのだろうか。この点に関しては「評価 valuing」という概念がスパルタ人の行動の背後に隠された理路を分析するのに役立つだろう。

「評価 valuing」には2つの意味がある。一つ目は尊重し respect、高く評価し regard highly、尊敬すること esteem。二つ目は査定し evaluate、見積もること estimate。アルキダモスの演説では、はじめ、他国の神々が承認を必要としているという考え、すなわち一番目の意味での評価が行われているが、やがて二番目の意味での評価に移行している。すなわちプラタイアイの神々の有用性を認め、この神々の利益、加護を占有しようとしている。尊重と査定とがともに現れている。スパルタ人の視点からすれば、プラタイアイの神々は彼らにとって共通のものではないが（共通の神であれば、詫びる必要などなかったはずだ）、「同じ」でもない（「同じ」神であれば、味方につくよう願う必要もなかっただろう）。大事なものは、プラタイアイの神々はその地方の、その土地の守護神だという点にある。スパルタ人はプラタイアイの征服に取りかかっている。そしてこの土地を司るもっとも権威のある存在、すなわちプラタイアイの神々以上に、彼らを援助するに相応しいものは誰もいない。そうするとスパルタ人にとってプラタイアイの神々は、彼らが自分たち自身の神々ではなく、他者の、プラタイアイ人の神々であることに価値があったことになる。こういった立場でのみ、この神々はスパルタ人に恩恵を与えることができたのである。

次の例では、他所（よそ）の神々について私利私欲なく尊重する態度と、ご利益を査定する態度との微妙な線が「所有」の観念に直結している。トゥキュディデス 4 巻 97-98 章には、前 424/3 年のデリオンにおけるアテナイ人の敗戦が記されている。戦闘に先立ってデリオンの防衛強化に努めていたアテナイ人は、境内に生えていた葡萄樹を伐採し、これを建材に利用した。戦闘がボイオティア人の勝利に終わると、彼らは戦勝記念柱（トロファイオン）を立て、アテナイに向けて伝令使を派遣した。途中、アテナイ人伝令使に遭遇した彼は、その伝令使を追い返そうとして、自分の方が先に使命を果たさねばならないのだと主張する。ボイオティア人伝令使は次のように述べている。

「アテナイ人は不正を働き、ギリシア人の掟を破った *ta nomima ton Hellenon*。というのも、相手国に攻め入っても、領域内の聖域には手をかけないというのが、皆の決まりになっているのだ。ところがアテナイ人がデリオンに城壁を築いてそ

³⁹ Versnel, *op.cit.* [n.17], 102-103; id. (1990) *Ter Unus. Isis, Dionysos, Hermes. Inconsistencies in Greek and Roman Religion*, vol.1, Leiden, 4-8.

ここで生活していたため、そこでは人間が俗世界で行なうことがあらかた行なわれた。神事のために手水とする以外には自分たちには触れることも認められていなかった水だって、アテナイ人は引いてきて使っていた。それゆえボイオティア人は、かの神（アポロン）と自分たちのために、アポロンならびに社を同じくする神霊たちに呼びかけて、彼らに自分たちのものを神域から持ち去るよう何度も勧告していたのだ」。かの伝令使がこう言うと、アテナイ人たちはボイオティア人に自分たちの伝令使を派遣し、次のように主張した。自分たちは神域に関して、何ら不正を働いてはいない、今後も被害を与えるつもりはない。というのも、そもそもそこには攻め入ったのではなく、むしろ不正者から身を守ろうとして入り込んでいたのだ。さらに神域というものは常に、大小を問わず、その土地を治める者に属するのであり、統治者が慣習を遵守するよう最大限の配慮を示すのが、ギリシアの掟なのである。実際、ボイオティア人を始め、多くの者たちが、他の者たちを追い出して、土地から無理矢理引きはがし、以前は他人の神域だったところに攻め入って、今や自分たちのものとして所有しているのである。

どうやら両者は外国人 *xenoi* による神域の扱いに関するギリシアの掟を、それぞれ別の仕方と解釈しているようだ。しかしながら問題なのは、掟の内容に関する見解の相違ではなく、掟が適用される状況を両者がどのように認識しているかにある。ボイオティア人はアテナイ人を侵略者、すなわちボイオティアの土地をごく短期的に占領している者と規定している。アテナイ人たちは自分たちを長期的な所有者と見なしている。つまり最大の問題はアテナイ人のデリオンにおける立場なのである。彼らは神域の侵略者なのか、新たな所有者なのか。ここではボイオティア人の方が自分たちの主張の正しさを十分に証明しているようだ。アテナイ人たちはボイオティア人のところにやってきて戦没者の遺体回収を許可するよう求めているのだが、ボイオティア人はアテナイ人にデリオンの神域から退去するよう願い出ている。ボイオティア人はアテナイ人が単なる侵略者であることを指摘しているのだ。すなわち、もしもアテナイ人がその土地を所有しているというのなら、遺体を回収するのにボイオティア人の許しは必要ないだろう。許可を願い出ていること自体、アテナイ人が自らを侵略者だと認めていたことを示している。

そうするとアテナイ人はボイオティア人の神域で生活し、樹木を伐採し、聖なる水を利用するのに躊躇していなかったということが分かる。これは他国の神域を侮っている事例とも言える。しかしこれは、自分たちの軍事計画に照らして、その価値を評価していたということに過ぎない。その一方でアテナイ人は、自分たちを神域の新たな所有者と規定しており、ということはつまり、この神域での振る舞いに関しては自分たちに適否を決める権利があって、そうである以上、自分たちはこの神域を相応に尊重しているのだと主張している。

さらにギリシアのある国が、祭祀のための像あるいはその他の祭祀用具を別の国から盗み取ったり、占有したり、もしくは平和裏に移動したりするようなエピソードについても目を向けるべきだろう。これらもまた、他のギリシア人が所有する宗教関連の施設や物品に対して、ギリシア人がどのような態度をとっていたかという議論に関わる。さまざまな逸話があるが、なかでも、テバイからシキュオンに半神

メラニッポスを勧請したときの話（ヘロドトス 5 巻 67 章）が、平和的な移動のひとつきわ明確な実例である。僭主クレステネスの求めに応じて、テバイ人はこの半神を差し出した。クレステネスの方にメラニッポスを崇めようなどという格別の動機があったようには思われない。しかし彼にとってこの半神には明らかに価値があった。それまでシキュオンではアルゴス系の半神アドラストスが祀られていたが、メラニッポスはこれに対抗する力を備えていたのである〔シキュオンはアルゴスと敵対関係にあった〕。そしてこのメラニッポスはシキュオンの地に迎えられ、プリュタネイオンに祀られて、そこで初めて崇拝の対象となった。それまでアドラストスを祀って行なわれていた祭祀が、メラニッポスに移されたのである。この例から明らかのように、地域の神／半神でも尊重されなくなることがあり、また他国の半神でも一度自分たちの土地に迎えられれば、価値のあるものと見なされ、敬意をもって呼びかけられることもあった。たしかにクレステネスのような僭主の行動は、反面教師として描かれるものであり、自分の土地の神から榮譽を奪いさるなどというのも危険な行為であった。しかし同時に、外部から半神を移動するという行為は無数に事例があり、いずれもギリシア人の態度変化のメカニズムを明確に描き出している。すなわち、神格が外部から領域内に移動するのと軌を一にして、ギリシア人の態度は「査定 evaluation [ご利益／利益の算定]」から「評価 valuation [尊重／崇敬する態度も加わる]」に変化しているのである。

続いての事例は、盗まれた祭祀像が、あるギリシア都市（エピダウロス）から他の都市（アイギナ）に移された話である（ヘロドトス 5 巻 82-86 節）。この物語では、神々を自分たちのものとするための方法が 2 種類提示されている。これらはそれぞれ垂直移動と平行移動とでも言えそうなものである。まず飢饉に見舞われたエピダウロスは、デルフォイの神託を仰ぎ、ダミアとアウクセシアの像を制作するよう託宣を下された。いわば抽象的な領域に潜在的に存在する神々を、エピダウロス領という具体的、物理的な領域に新たに勧請したようなものである。これに対してアイギナ人は、この神像をエピダウロスからサロニコス湾を渡って自国領へと平行移動させた。さて、この平行移動は「他所（よそ）の神々を評価する valuing」という観点からどのように説明すべきだろうか。まずこの神像は、アイギナ人にとって他人のものだからこそ価値があった。エピダウロス領にあるとき、これらは価値のあるものではあったが、崇敬の対象ではなかった。しかし一度アイギナの土を踏み、これらを奉るための儀礼と供犠が創設され、神々の方でもこの島に留まることを了承する。アテナイ人がこの像を持ち去ろうとした際、この神々は同行を拒否したのである。これ以後ダミアとアウクセシアは崇敬の対象となり、儀礼を通じて崇拝されるようになる。この場合も明らかに、査定 evaluating と評価 valuing の力学が所有権に規定されている。すなわち神格というものは、境界線の向こうにあっても価値は認められるが、こちら側で占有できれば、その時点で崇敬の対象に変化するのだ。

この他、古代ギリシアには半神の骨を移動させる物語がいくつもあり、似たような筋の物語が数多く確認できる。中でも悪名高いのはテゲアからスパルタへと移さ

れたオレステスの骨の物語である（ヘロドトス 1 巻 66-68 節）⁴⁰。ここでは典型的に、ある国から他国へ、ある政治的領域から他の政治的領域へ骨が移されている。言い換えれば、「聖遺物 relics（半神の骨）」は所有者が替われば、尽くす相手を変えなければならないのだ（元々あった場所で、その地の住民に明確に尽くしていたか否かは別として）。聖遺物 relics には実際的なご利益があり、所有欲の対象となるが、自国の政治的・空間的領域に持ち込まれて初めてそのご利益が実現する。価値のある骨が崇敬の対象となるには、他所から持ち込まなければならない。またある意味で、他国にあること、他人が所有しているということが、その骨を価値あるものとしていたようにも思われる。

6. 結論

以上の議論を概括しよう。第一に文献史料を見る限り、古代ギリシア人が自分たちのことを、全てのギリシアの神々を分け隔てなく承認する、一つにまとめた宗教集団だと思っていた形跡はほとんど認められない。異なるギリシアの国々を宗教的に結びつける「共通」の紐帯と言ったとき、そこで指示されているのは特定のパンヘレニックな神殿に関連する特定の神格であった。第二に、他所（よそ）の神々を評価する valuing という概念は所有／所属の概念と密接に結びつき、他者が所有する神殿や祭祀関連の物品、神格などを利益のあるものと見るか、それとも崇敬の対象と見なすか、見方の違いによって分けられる。しばしば他者が所有しているということ自体が、まさに宗教的な物や領域の価値であり、それらを手に入れようとする際の動機ともなっていた。そうした物を手に入れ、あるいは取り戻そうとするのは、危険を伴う。たとえばデルフォイの神託やその他、神々からの予兆を通じて承認を得る必要があった。利益のあるものから崇敬の対象に変わるのは、すなわち外国の物から自国のものに変化することであった。

ギリシア人は他所（よそ）の神々の実際上の所有者になったとき、あるいは法制上の所有権を主張することになったときには（神格の移動であれ、境界線の移動であれ、いずれにせよ所有者は変更される）、いつでも伝統的な方法でこれらの神々を祀り、崇敬していた。すなわち評価するという感覚 the sense of valuing は、神々に現実に対応する中で二分されていたのである。つまり他者性は価値や有用性を示し、所有権は崇敬を意味していた。パンヘレニックな神域の神々はおそらく両方の意味で評価 value されていた。しかしそこにはいつでも神々の利益をめぐる争いがあった。そうした部分では、崇敬する感覚よりも有用性を量る感覚の方が勝っていたことになる。

ギリシアの神々が同一であるという考え方 sameness は詩にしか存在しない。すなわち、ヘシオドスの『神統記』やホメロスが詠う神々は、スパルタ人にとっても、アテナイ人にとっても同一 same で、重要性も変わらず、同じように抽象的でもあった。しかし現実には、境界線を越えても中立で、同一の神など存在しなかった。神々はいつでも誰かの所有物であり、その所有権が評価する valuing 際の態度を決定

⁴⁰ B. McCauley (1999) *Heroes and Power: The Politics of Bone Transferral*, in R. Hägg (ed.) *Ancient Greek Hero Cult: Proceedings of the Fifth International Seminar on Ancient Greek Cult*, Göteborg University, 21-23 April 1995, Stockholm, 96, n.40 がそうした事例を列挙している。

していた。詩人ピンダロスであれば、神々一般について抽象的に述べることもできただろう。そしてそこで詠われる神々はどのギリシア人にとっても同一で、関与の程度も同程度だっただろう。しかし詩人は、競技祭優勝者とその所属共同体に恵みを垂れるよう願うとき、特定の神々、すなわち特定の都市や場所に結びついた神々に呼びかけている。もはや同一性や中立性、公平性などは念頭にない。神々は名指しで呼びかけられてこそ、その人間を最も有効に援助する。だからこそギリシア人は神託を伺う際、何度もくり返し「どの神々あるいは半神を」宥めるべきだろうか、と尋ねていたのである。それは単に、多神教ゆえに、数えきれないほどの神格から一つ、あるいはいくつかの神格を選ばなければならなかったということに留まらない。それはおそらく、その人にとって有用な有力者の住所と氏名を手に入れるようなものだったのかもしれない。ピンダロスはこうしたことを十分に分かっていた。それゆえ彼は、栄冠に輝いた選手をパンヘレニックな神格の庇護の下に置き、抽象的に、パンヘレニックな名声を与える一方で、選手の成功に役立つ具体的な地方の神々の予約リストにその名を書き入れたのである。